

映画作家・河瀬直美

- ✓日本人女性初！日本人として、9年ぶり5人目となる「ユネスコ親善大使」に就任
- ✓国際的なカタルーニャ文化振興支援の貢献者に送られる
アンドラ「Ramon Llull Prize」を受賞！



 institut
ramon llull

奈良を拠点に活動する映画作家 河瀬直美は、この度、11月25日(木)にパリの国連教育科学文化機関 (UNESCO ユネスコ) 本部にてオードレ・アズレ事務局長 (フランス出身) よりユネスコ親善大使任命の委嘱書を授与され、日本人として5人目、また日本人女性で初めて「ユネスコ親善大使」に就任しました。

また、11月26日(金)には、カタロニア文化の国際的な振興を支援した貢献者に対して、アンドラ政府とラムン・リュイ・ファンデーション¹から共同授与される「Ramon Llull Prize」 (ラムン・リュイプライズ) を日本人女性として初めて受賞し、授賞式に参加します。

ユネスコ親善大使の活動として、2022年夏に再開される文化交流プログラム「Grand Voyage with Africa」²にて、プログラムアートディレクターとして、アフリカ5カ国から選ばれた若手女性映画作家10名との映画ワークショップを統括します。

<ユネスコ親善大使 任命理由>

河瀬直美は、あらゆる年代の女性に焦点を当てた映画や映像制作を通じ、文化・クリエイティブ産業におけるジェンダー平等推進への貢献という観点から、ユネスコ親善大使に任命されました。

以下、任命理由です。

- ・2020年5月、COVID-19の流行が文化・クリエイティブ産業に与える影響についての認識を高めるために、ユネスコオンラインディベート「文化とコロナウイルス～アートの力を考える～」を日本で初めて開催し、ResiliArt Japanの認知拡大に貢献したこと。
- ・あらゆる年代の女性の生活に焦点を当てた映画によって、人類への理解を深めるきっかけを提供したこと。
- ・ユネスコの主要なメッセージの1つである「あらゆる女性の声を含む多様性の価値と大切さ」を、自身の人生とキャリアを通して実現していること。

これらは、国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に沿って、すべての国が男女平等の実現を目指している今、特に重要と考えられています。

<アンドラ「Ramon Llull Prize」受賞理由>

河瀬直美は、2020年に開催した「なら国際映画祭³」でカタルーニャの”女性監督”による映画を6作品上映。本上映会は、カタルーニャ政府の日本企画として「インスティテュート・ラモン・リュイ（カタルーニャの言語と文化を他国に広める公的機関）」「カタラン・フィルム & TV」「なら国際映画祭」の共催で実現し、映画を通してカタロニア文化と女性活躍を世界に発信しました。

<映画作家 河瀬直美のコメント>

この度、ユネスコ親善大使に任命されましたことを大変誇りに思います。

この地球上に暮らす、すべての人が唯一無二の存在として、その人生を謳歌する権利を有しています。けれどあらゆる「ひずみ」の中で、特に女性の声を含む、小さな声がかき消されてゆく現実も目の当たりにします。これら多様な価値観に光を当て、たしかな命のきらめきに気づかなければならない。人類の根源的に豊かな営みを1000年先にも、またそのずっと先にも繋いでゆきたい。映画や映像制作を通じて、物語の中に、人類の豊かな未来を創造すべく、親善大使としての任を全うしたいと思います。

河瀬直美

これからの河瀬直美の活動に是非ご期待ください。

- 1 カタロニア語と文化の研究、促進、保護の強化を支援している組織。
- 2 2019年のTICAD（アフリカ開発会議）から生まれた文化交流プログラム。
- 3 奈良の平城遷都1300年目となる2010年から、映画作家の河瀬直美をエグゼクティブディレクターに迎え、2年に1回開催されている国際映画祭です。国内外の若手監督と奈良を舞台とした映画制作「NARActive」プロジェクトや、子ども・海外学生とのワークショップ、奈良市内を移動する映画館「ならシネマテーク」など、映画の魅力を伝える数々のプロジェクトを実施しています。次世代を担う子どもたちのプロジェクトの充実を図り、若き才能あふれる芸術の力で、世界を再び繋げていけるように映画の魅力を発信しています。

<ユネスコ親善大使とは>

国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の認知向上に貢献することを目的にし、ユネスコの活動を支持する各界の著名人から成る親善大使。1989年に日本人として初めて平山郁夫画伯が就任して以来今回で5人目となります。1人目は、1989年～2009年平山郁夫氏。2人目は1991年3月～1999年11月まで藤森鉄雄氏（当時日本ユネスコ協会連盟会長）。3人目は1991年9月～1996年10月まで杉良太郎（山田勝啓）氏（歌手・俳優）が親善大使兼識字特使（国際識字年特使としては1990年4月に就任）。4人目は2012年3月より千玄室氏（茶道裏千家15代・前家元）。5人目は2021年11月より映画作家河瀬直美。

<「Ramon Llull Prize」とは>

アンドラ政府とラモン・リュイ研究所が共同で設立したラモン・リュイ基金が主催しており、国際的なレベルでカタルーニャ語とその文化の研究、普及、保護を強化することを目的としている。河瀬直美の受賞は日本人女性初。

<河瀬直美 プロフィール>

生まれ育った奈良を拠点に映画を創り続ける。一貫した「リアリティ」の追求はドキュメンタリー、フィクションの域を超えカンヌ映画祭をはじめ、国内外で高い評価を受ける。監督代表作は『萌の朱雀』『殞の森』『2つ目の窓』『あん』『光』『朝が来る』など。

DJ、執筆、出演、プロデューサーなど表現活動の場を広げながらも故郷奈良にて「なら国際映画祭」を立ち上げ、後進の育成にも力を入れる。

東京2020オリンピック公式映画総監督、2025年大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー（シニアアドバイザー兼務）、バスケットボール女子日本リーグ会長。

プライベートでは野菜やお米をつくる一児の母。



©2021-International Olympic Committee-All Rights Reserved.

<経歴>

- 1989年 大阪写真専門学校（現ビジュアルアート専門学校）映画科卒業
- 1995年 自主映画『につつまれて』、『かたつもり』が、山形国際ドキュメンタリー映画祭をはじめ、国内外で注目を集める
- 1997年 劇場映画デビュー作『萌の朱雀』でカンヌ映画祭カメラドール（新人監督賞）を史上最年少受賞
- 1999年 ドキュメンタリー作品『杣人物語』ニオン国際映画祭特別賞
- 2000年 『火垂』ロカルノ国際映画祭国際批評家連盟賞、ヨーロッパ国際芸術映画連盟賞
- 2003年 スペイン／バルセロナにて河瀬直美回顧展開催
- 2004年 ヘルシンキにて、回顧展開催
- 2005年 カリフォルニア、HILAVA ドキュメンタリー映画祭にて回顧展開催
- 2006年 スペイン・イスラエル・ニューヨーク・シンガポール・ベルリンにて回顧展開催
『垂乳女』山形国際ドキュメンタリー映画祭特別賞受賞
- 2007年 『殯の森』でカンヌ映画祭グランプリ（審査員特別大賞）を受賞
- 2009年 カンヌ映画祭に貢献した監督に贈られる「黄金の馬車賞」を受賞
- 2010年 「なら国際映画祭」創設
ドキュメンタリー作品『玄牝-げんぴん-』サンセバスチャン映画祭国際批評家連盟賞、リバーラン国際映画祭最優秀撮影賞
- 2011年 『朱花の月』イタリア・スガルディアルトローベ国際女性映画祭最優秀作品賞、モロッコ・サレ国際女性映画祭最優秀グランプリ
- 2013年 カンヌ映画祭コンペティション部門の審査委員に就任
- 2014年 『2つ目の窓』リバーラン国際映画祭最優監督賞、ドルトムント女性映画祭グランプリ
- 2015年 フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」を叙勲
『あん』が国内外で大ヒット
- 2016年 カンヌ映画祭シネフォンダシオン・短編部門の審査委員長に就任
- 2017年 『光』がカンヌ国際映画祭 エキュメニカル賞を受賞
東京芸術劇場シアターオペラ『トスカ』を演出
- 2018年 『Vision』（ジュリエット・ビノシュ主演）世界公開
パリ・ポンピドゥセンターにて大々的な「河瀬直美展」開催
- 2020年 「朝が来る」世界公開
東京2020オリンピック公式映画総監督
Netflix Homemade シリーズ「Last Message」世界配信
- 2021年 なら国際映画祭 for Youth 2021 開催
2025年大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー（シニアアドバイザー兼務）
バスケットボール女子日本リーグ会長

【本件に関するお問い合わせ先】

河瀬直美 ユネスコ親善大使任命 PR 事務局 担当：石原（070-3190-3671）

Tel: 03-6894-3200 Fax: 03-5413-3050 E-mail: kawase_pr@ssu.co.jp

【河瀬直美に関するお問合せ】

組画 TEL：0742-27-2216 Fax：0742-26-1830